

二百十日 明治 39 年（1906 年）10 月、中央公論に発表。

漱石の熊本時代に同僚の山川新次郎とともに阿蘇山に登山した経験を基にして書かれた短編。華族や金持ちをこれ以上助長させてはいけないと、二十世紀に「文明の革命」を起こすのだと熱く語る「圭さん」と、それを冷静な態度で聞く「禄さん」の二人のやり取りが、阿蘇山頂を目指しながら展開していく。だが、途中、二百十日の嵐によって道に迷い、野宿する羽目になる。翌朝、二人はまた新たな気持ちで阿蘇山山頂を目指す。巧妙な会話に落語好きだった漱石の一面がみられる。

あらすじ

阿蘇登山にやってきた圭さんと禄さんという二人の青年。豆腐屋に生まれた圭さんは、華族や金持ちたちに敵愾心を燃やし、二十世紀に「文明の革命」を起こすのだと気焰をあげる。一方、彼より恵まれた環境に育った禄さんは、圭さんのように強い意志を持つことができない。かといって、華族や金持ちの仲間にも慣れない宙ぶらりんの立場である。そんな禄さんの背中を計算が押すように上った阿蘇山で、二人は頂上を前にして二百十日の嵐に襲われる。引き返してきた宿で圭さんはサイドの朝鮮をうながすが、恐れをなした禄さんは最後まで及び腰の態度をとる。

<https://youtu.be/iShO09UtvQU>

野分 明治 40 年（1907 年）1 月、ホトトギス

二百十日を深化させた内容となっている。地方の中学教師を転々とした主人公白井道也は東京に戻り、雑誌記者弥翻訳で生活費を得ている。拝金主義を嫌悪し、瀛瀛に生きようと決意しているが現実には厳しい。道也の人物造形は、のちの「こころ」の先生に、妻の政は「道草」のお住へとつながっていく。

あらすじ

文学士・白井道也は地方の英語教師をしていたが、金や地位に拠って働く地方の人々と衝突を繰り返し、現在は東京に戻り編集の仕事をしてながら「人格論」を執筆している。肺結核もちで経済的に苦しく、文学者としての成功は程遠い教え子の高柳周作、その友人で裕福な家庭に育った中野揮一という友からそんな白井道也の噂を聞く。実は高柳は中学時代、しらいの排斥運動に力を貸した生徒の一人だった。罪の意識を感じた高柳は、その動向を調べるために白井が雑誌に寄稿した檄文を読んで、彼の思想に心酔する。そして、しらいに教を請うとともに、罪の代償を支払うことを決意する。

三人三様の文学者の姿が描かれる。自己を発展させ、「理想の大道」を求めて戦うことを力説する白井道也の姿には、文学者であることに誇りと使命感を持つ漱石の理想が感じら

れる。

「野分」。文学者の白井道也は、大学を出た当初は地方で教師をしていたが、地元の金持ちや権力者に対して遠慮なくその批判をするので煙たがられ、新潟、九州、中国地方と三度も辞職をし、東京に戻ってきた。今度は教師になる心づもりもなく、家計のことで妻に文句を言われながらも「江湖雑誌」なる雑誌の編集者や辞典の編纂をしながら自分の著述である『人格論』の草稿を書いて暮している。

大学を出たばかりの高柳周作と中野揮一は、方向性は異なるものの小説を書こうという望みが共通していることもあり仲がよく、時おり会って話をする。といってもそれは、実家が裕福な中野が、田舎から出てきて貧乏しており学生時代に輪をかけて孤独を深める高柳をつかまえては食事を奢ったりする格好である。糊口をしのぐ辛さを話すうち、高柳は田舎の中学校に通っていた頃、他の教師に唆され辞職させてしまった白井道也のことを語り、済まないことをしたと反省する。

中野の家に、「江湖雑誌」の取材のために白井が訪れる。中野がそのことを高柳に伝えると、彼は件の雑誌を読み、白井のもとを訪れる。自分の考えを皆に広める道のためには孤独を厭わないという白井の言に、高柳は感動する。

中野は妻を娶り、たった 1 人の友と疎遠になった高柳は孤独を深め、体調も崩してしまふ。一方、『人格論』を出版しようとするものの買い手となる本屋（出版社）がつかず、それでも泰然としている夫に業を煮やした白井の妻は、中野の父の会社で役員をしている白井の兄と共謀して、借金の取り立てを演出して夫を教師勤めに戻そうと画策する。

兄と妻の妨害にもめげず、演説会の壇上に立った白井は畢生の演説をし、青年たちから悪からぬ評価を得る。これを聞いていた高柳は勇気付けられるが、彼の体は結核に侵されていた。心配した中野は妻にも促され、高柳に転地療養のための資金 100 円を用立てる。養生のついでに原稿を書き、快癒の暁に中野に渡すという条件で、高柳はこれを受け取る。が、暇乞いに訪れた白井の家で、借金取りに困らされている白井を目の当たりにすると、高柳は『人格論』の原稿を買い取る代金として白井に 100 円を渡す。そして、自分がかつて新潟の中学で白井を辞めさせるのに加担した元生徒であると告げた。

友情は、「野分」でも高柳と中野の間に認められると思う。片や田舎出身の貧乏で片や東京の社長の息子という、微妙な立場の 2 人だが、少なくとも中野は高柳を切り捨てようとはしていない。

ただ、高柳の方には自ら殻にこもるようなところがあって、そこはもう少し考えようがあるのではないかと思った。彼の延長線上にいる白井先生についても同じである。

白井先生は高柳に対して語る時や演説する時はすこぶる立派で、考えていることも私は理解できるのだが、妻に対する時は、やっぱりどうしても情けなさが出ている。妻や兄を、自分より愚であると決めつけているところが、まずいのではないかと思った。「負うた子に

教えられて浅瀬を渡る」という諺があるように、誰からも何かを教わることができるというのは、賢者と呼ばれる人の条件ではないかと思う。

漱石が何を指してこの小説の人物たちを描いたのかまでは知らないのだが、最終的に高柳は自分を投げ打って白井先生を助けることになったわけで、かつて恩師を辞めさせたという罪の意識が高柳にあったにせよ、つまり“若き同朋を犠牲にして立つ学者”みたいな構図に読めてしまうところが残念である。

ただ、白井と高柳の関係はぎこちない師弟という感じで好きである。後の『こころ』での「先生」と「私」の関係を思い出したりもする。

以下、気になった部分を2つほど引いて結びたい。

世はわが思うほどに高尚なものではない、鑑識のあるものでもない。

白井が学校を3度も辞めたあたりの文章。「世の中は意外といい加減」というのは、社会人になって1年もしないうちに私も考えたことである。表からみるとしっかりしているように見える会社や組織や製品も、裏に回ると意外と適当なことがあって戦慄した。

「空想的で神秘的で、それで遠い昔しが何だかなつかしいような気持のするものを書きたい。……」

どんな小説が書きたいかと問われた中野の台詞である。ノスタルジックな作品への希望が既に当時にあったということに驚く。この小説が発表された明治40年から見た時の「遠い昔し」とはいつ頃のことで、彼（≡漱石）のノスタルジーはどの辺りのことを指していたのか、かなり興味深い。

「野分」はマイナーですが、夏目漱石自身の生き方（価値観）を、そのまま表しているものですね。そういう意味で、私も好きな一冊です。

ただし、読み方には、色々あります。

登場人物の道也先生の生きざまに焦点を合わせるとか、昔に学校で一緒に苛めて追い出した高柳君の生きざまや、道也先生との出会い（師弟として）と読むか、それとも道也先生と妻との価値観の相違など、それはどれでも良いと思います。

大事な事は、あなたが、道也先生の生きざまに、何らかの共感を持たれた事だと思います。言い換えると、本中での、道也先生と高柳君との出会いのようなものを、本を通じて得られたのだと思います。

夏目漱石という人物は、文学博士を辞退したり、いわゆる世間の価値観より、自分自身が「良い」と思う価値に重きを置いた生き方をした人物です。

類まれな才能という部分での面白さ以外に、私は、夏目漱石自身の生き方を作品から読み取るところが、一つの夏目漱石の読み方ではないかと思います。

しかし、その部分（漱石の価値観、人間観 e t c）は、安易に解説できない部分でもあると思います。

言い換えると、共感を通じて、感じ取っていく以外に道はないのだと思います。

そこで、私が思っている「野分」を理解する方法の一つを、お伝えします。ただし、私が個人的に考えている事ですから悪しからず。

●夏目漱石の人間観の一貫性、問題意識から

・よく、修善寺での大吐血を経て「則天去私」という考えに至ったと思われがちですが、早期の作品である「草枕」にも、それに通じる世界観、人間観などがあります。そういう意味で、夏目漱石の人間観の一貫性の中の一つの作品として捉える。

●他の作品との、登場人物の人間観の類似性から

・「虞美人草」のヒロインである「藤尾」の生き方と対局にある生きる方向性を持った道也先生の生きざまと捉える。

●ヒントとなる本

- ・「草枕」
- ・「虞美人草」
- ・「漱石の思い出」 夏目鏡子（著）

●最後に

・「哲学的でなかなか難しい為、理解できる場所もあればできないところも多いです」という事ですが、それはそれで良いのだと思います。

・あなたが、何らかの共感を持たれた事が大事なのです。

・読みこなすには、何度も読まないといけないから、何度も読みましょう。私も5、6回は読んだと思います。

全12話で構成される。

白井道也は東京に戻ってきて仕事を探していた（1話）。

草稿を失い探していた高柳は親友の中野と会い中野は白井について話す（2話）。

中野は白井と会い江湖雑誌の現代青年の煩悶に対する解決で取材に来たが、何思い浮かばず保留する。中野が帰った後、妻が兄の所から帰ってきた (3 話)。

中野は動物園の前にいる音楽を見に来た高柳に話しかけたり、冬田にも会い白井のことを話す (4 話)。

高柳は朝日新聞を読み文界で成りたいものになりたかった時、富田が来たので富田と話す (5 話)。

高柳は白井と会い文学について話す (6 話)。

女性と善人がビーナスや、高柳について話していた (7 話)。

一人ぼっちの高柳は愚痴をこぼし気晴らしで白井へ会いに行き過去を話す (8 話)。

56 人の卒業生たちによってひらかれた結婚式がに高柳が遅く来た (9 話)。

本が売れず困り果てた白井に妻や兄から心配される (10 話)。

白井は壇上に立ち学問とは何か、社会は修羅場であることを聴衆に伝える (11 話)。高柳は客として登場。

高柳は結果と診断され中野から 100 円を渡された。しかし、高柳は白井に会い白井の 100 円の人格論の原稿料を 100 円と交換する。そして、自らがかつて白井をいじめていた学生の一人と謝罪する (12 話)。

登場人物

白井道也 (しらいどうや)

文学者。8 年前大学を卒業し越後から始まり 23 か所の中学を周り一年前に東京へ戻る。

英語の教師から現在は編集者となる。

既婚している。

越後の高田では多くの人間が白井を批判し、九州へ行くも金の力が強くうんざりして中国地方へ行きここでは土着文化が強く合わず東京へ戻った。

中野曰く「いい先生」だった。

人格論をかこうとしていた。

白井の妻

白井が辞職したことに驚く。

白井の兄

会社役員。

高柳周作

皮肉屋であり人に関わろうとしない。中野は親友と見ている。

父親は郵便局の役人だったが高柳が 7 歳のころに逮捕され肺病で死亡。そのため、遺伝で自身も肺病があるのではと考えている。

文芸の世界で名を残そうとしている。

終盤で故郷が越後でかつて白井をいじめていた学生の一人。

中野輝一

高柳の友人で同じ学校、宿舎に住む。

富豪で雑誌編集者。

越後出身でかつて中学教師たちに煽動され 15 人の生徒たちとともに白井の家の前に来て石を投げ当時は面白かったが白井が出て行ってしまい悪かった思っている。

ペンネームは「中野春台」。

冬田

女性。

富田

高柳の友人。

『野分』は打って変わってずいぶん烈しい。主な登場人物は、高尚な理念を持つものの売れない文学者の白井道也、学卒後に文学を志すが貧しい生活を送る高柳周作、そして高柳の友人で新進の文学者ともてはやされている富豪の中野輝一などだ。明治維新から 40 年余りが経ち、日本は物質的には徐々に近代社会の仲間入りを果たしつつあったが、精神的な面では相も変わらず金持ち層や権威ある華族が優先される付属物重視の不公正な社会だった。そんな人間の上っ面だけを見て人格を重んじようとしない社会的風潮や時勢に流されてばかりの未熟な文壇に対して漱石は烈しい憤りを見せる。

各々が置かれている艱苦の立場はまさに明治中期の日本の縮図である。漱石は本書を著すにあたって「いやしくも文学を以て生命とするものならば単に美というだけでは満足が出来ない。丁度維新の当士勤王家が困苦をなめた様な了見にならなくては駄目だろうと思う」「あんなのばかりが文学者ではつまらない（中略）命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい文学をやって見たい。」と述べ、主人公の白井道也に現代における維新の志士の役目を担わせた。

道也が大衆に向かって演説をする場面がある。その言葉が全てを物語る。会場の若き文学青年に対して「過去を未来に送り込むものを旧派、未来を過去より救うものを新派だ」「理想のあるものは歩くべき道を知っている」と説き、そして「社会は修羅場である。文明の社会は血を見ぬ修羅場である。」と熱弁をふるう。現代の日本を牛耳る旧態依然とした権力や階級を打破する事は容易ではないが、過去も未来も気にせず自己を歩むべき道を発展させよ、それが君たち若者が背負った公的な使命なのだと主張するのである。道也が社会から是認された瞬間だった。

漱石の狙い通り本書は文学を志す若き青年にインパクトを与えた。文学者紅野敏郎の解説によると、志賀直哉や細川護立、武者小路実篤ら当時 20 代の青年は、学習院時代、授業中に『野分』を回し読みし、感銘を受けて、文学で生きていく事を決意したとある。白井道也はこう云っていた。「諸君のどれ程に剛健なるかは、わたしには分からん。諸君自身にも

知れぬ。只天下後世が証拠だてるのみである。」「諸君は諸君の事業そのものによって伝えられねばならぬ。」と。漱石が命を懸けた言葉が青年の心を動かしたのである。そして本書は今も伝えられている。

野分

●1章

道也先生は大学を8年前に卒業。
越後、九州、四国の3か所で教師をするが、
いずれも人と揉めて退職。
東京に戻って物書きを始める。
妻はそのことをよく思っておらず、
普通に働いてほしいと思っている。

●2章

高柳君と中野君は、この春、
同じ大学を卒業した高校時代からの親友。
高柳君は貧乏で人と関わらない皮肉屋。
中野君は裕福で円満な性格。
何もかも正反対な二人だが、なぜかウマが合う。
高柳君は中学時代、道也先生の教え子だったが、
ある教師に扇動されて
道也先生を中学から追い出した過去があった。
高柳君はそのことを悔いていると中野君に語る。

●3章

道也先生が中野君の家を訪ねる。
雑誌「江湖」に載せる話を聞くためだ。
中野君は恋愛論を大いに語る。
話が終わった後、
中野君は高柳という男を知らないか聞くが、
道也先生は知らないと言う。
道也先生が帰宅すると、
妻が、百円の借金があることを
道也先生の兄に伝えたこと、
兄が「自分が保証人になって百円を借りても
いい」と言ったことを道也先生に話す。
道也先生は「あと一月もあれば百円くらい

すぐに手に入る」と一笑に付す。

●4章

中野君が高柳君を誘って音楽会に行く。
華やかな席に場慣れしている中野君に対して、
こういう場に縁がなく、居心地の悪い高柳君。
音楽会の後、中野君は高柳君に
道也先生が訪ねてきたことを話す。
高柳君は咳をされていて体調が悪いようだ。

●5章

高柳君は中野君の恋愛論が掲載された
雑誌「江湖」に目を通す。
同雑誌に載っていた
「解脱と拘泥」という文章も読む。

●6章

道也先生の家を訪ねる高柳君。
過去のことはなかなか話せないが、
中野君が自分の友人であることや
「解脱と拘泥」に感銘を受けたことを語る。
「解脱と拘泥」は道也先生の作であり、
僕の文章をほめてくれたのは君が初めてだと
道也先生は喜ぶ。
やせていて咳をする高柳君の体調を
道也先生は心配する。

●7章

婚約者と仲睦まじく語り合う中野君。
話の中で、高柳君や道也先生のことも。
高柳君は新潟出身で、気難しく、
中学時代、学校から道也先生を追い出したこと。
以前、道也先生が中野君の家に来た時、
婚約者とすれ違っていたこと。
婚約者は道也先生の下駄が
草履のように薄くて驚いたこと。
色々なことを語り合う二人だった。

●8章

体調が思わしくない高柳君は
「一人ぼっちだ」と何度もつぶやく。

外へ出歩くと道也先生に会う。
高柳君は道也先生に自分の歴史を話す。
父が公金横領の罪で逮捕され、
獄中で肺病のため亡くなったことを……。
自分も肺病かもしれないと……。
道也先生は一人ぼっちでもいいと言うが、
高柳君はそうは思わない。

●9章

中野君の結婚式。
高柳君は用があって遅れて到着する。
新婚夫婦に挨拶をした後、
一人取り残される高柳君。
こういう場に来たことがない高柳君は
居心地が悪い。
新婚夫婦にもう一度挨拶をして
早く帰ろうとするが、
夫妻の周りにはたくさんの人がいて
そこまでたどり着けない。
仕方なく挨拶をせず高柳君は帰った。

●10章

「本は売れたのか」と道也先生に尋ねる妻。
道也先生は全然売れないと言う。
同輩で今は大学教授の足立の推薦文があれば
出版できるかもしれないが、断られた。
道也先生は外出するが、妻の不満は募る一方。
その時、道也先生の兄がやってくる。
兄は会社の役員で、
その会社の社長は中野君の父だ。
兄は妻と相談して、
兄が立て替えていた百円の借金の返済を
厳しく催促することによって、
道也先生が自ら教師をやると言い出すよう
段取りを立てる。
道也先生は今度演説をするようだ。
演説を止めさせたい兄は、
急用の使いを送ることにする。

●11 章

兄から急用だという使いが来るが、
道也先生はそれを断る。
この演説は前からの約束で、
人を救うための演説だからと。
ある事件扇動の嫌疑をかけられた家族に、
演説会の収入をまわす計画なのだ。
道也先生は演説に行く。
会場には体調がすぐれない高柳君も来ていた。
いよいよ道也先生の演説が始まる。
冷やかし気味だった聴衆も、
道也先生の硬軟織り交ぜた演説に
次第に引き込まれていく。

金持ちを非難する内容の演説に、
聴衆は拍手喝さいを送る。
高柳君も肺病にもかかわらず、
わが意を得たり、と大きな歓声を送った。

●12 章

高柳君の見舞いに中野君が来る。
高柳君は演説を聞いたあと、
とうとう吐血するまで体調が悪化していた。
中野君は高柳君に、金は自分が負担するから
転地して養生するよう勧める。
断る高柳君だったが、中野君は
高柳君が思案中の小説を完成させる費用を
自分が負担する形を提案する。
転地先で養生しながら小説を執筆して、
完成したら一大傑作として世に送り出そうと。
高柳君もこの申し出は受け入れ、
中野君から百円を受け取る。
高柳君は養生先へ出発前、
道也先生に挨拶に出向く。
道也先生宅には、
兄の使いの借金取りが来ていたが、
道也先生は構わず高柳君を部屋へ通す。

明日養生先へ発つことを伝える高柳君。
道也先生は借金取りに、著作が売れるまで
百円の返済は待ってくれと頼むが、
兄の意向を受けた借金取りは首を縦に振らない。
話を聞いていた高柳君は、
道也先生の著作「人格論」を見せてもらう。
そして高柳君は道也先生に、
「人格論」を百円で売ってくれと頼む。
自分は越後であなたをいじめて
学校から追い出してしまった。
自分是你の弟子なので
この「人格論」を譲ってくれと。
驚く道也先生に高柳君は百円を渡して
「人格論」を受け取る。
高柳君は自分の著作の代わりに、
「人格論」を中野君へ渡しに向うのだった。

感想と見どころ3選

道也先生と高柳君、二人の対比

主人公・道也先生と
もう一人の主人公・高柳君。
この二人の対比が
本作の大きな見どころだと思います。
二人とも大学を出ていますが、
共に人づきあいが苦手で
物書きの仕事も上手くいっておらず、
生活は非常に苦しい。
対照的なのは、そんな現状を
道也先生は構わないと思っていますが、
高柳君は不満を募らせていること。
どんな状況でも泰然と構える道也先生に対し、
高柳君は体調まで崩してしまう・・・。
同じような境遇なのに、心の持ちよう一つで

こうも違うものなんだなと。
作者自身は一体どちらだったのか……。

周囲の人から見た二人

道也先生と高柳君の対比も面白いですが、
周囲の人々から見れば
この二人はいわゆる似た者同士。
人づきあいが苦手で
まともに働いていないという（^^）
そんな二人を
周囲の人はどういう風に見ていたのか、
その記述もたくさんあるので、
そこも本作の見どころだと思います。
道也先生の妻と兄、
高柳君の友人の中野君夫妻、
彼らの道也先生&高柳君評ですね。
妻や友人＝世間一般の人が、
道也先生&高柳君＝変わり者たちを
どのように見ているか、そういう視点です。
基本的にボロクソに言ってますが（^^）；
作者自身が周囲の人間から
どのように思われていたのかを、
自ら書いたとも言えるでしょうか。

道也先生の演説

この小説で一番盛り上がる場面が、
第11章の道也先生の演説です。
12章は重要な展開もありますけど
エピローグみたいな感じだし、
事実上、11章がクライマックスでしょう。
演説の中で、道也先生は
世の中に対する不満をぶちまけ、
金持ちを徹底的に批判します。
作者本人の思いも
大いに入っているはず（^^）
まあ今の感覚だと、
作者も世の中の「上」の側の人間で
金持ちだったんじゃないの？

って思いますけどね（^^；
だって夏目漱石ですよ（^^）？
まあ後の世の大文豪も、
当時は不満を抱えまくりだったと
いうことでしょうね。
ともかく道也先生の演説は、
肺病で倒れる前夜の高柳君が
大声で喝采するぐらいに大盛り上がり（^^；
こんな演説ができれば、
どんな選挙でも当選間違いなしです（^^）

まとめ

「野分」は「二百十日」と
セットで語られることが多い作品。
どちらも知名度は高くないですが、
作者の世の中に対する
色々な考え方（ほとんど不満^^；）が
詰め込まれています。
難解でも長編でもないので、
作者をより深く知る上で
読んでおいて損はない作品だと思います。